

# 幸福度世界一の国 フィンランド



日・フィンランド社会保障協定の署名（2019年・筆者は左端）

## 大杉 周作 （おおすぎ しゅうさく）

前・在フィンランド日本国大使館一等書記官  
国土交通省北海道開発局旭川開発建設部農業整備課長

2004年国土交通省入省。北海道開発局の各農業事務所、農林水産省（出向）等の勤務を経て2019年3月から2022年3月まで在フィンランド日本国大使館に勤務。2022年4月から現職。

### はじめに

皆さんは「フィンランド」と聞いて何を思い浮かべますか？森林と湖が多い自然あふれる国、北欧デザインの素敵な国、IoTやAIの先進国、最近ではフィンランド語唯一の世界共通語と言われる「サウナ」や世界幸福度ランキング1位の国など様々かと思いますが、全体として良いイメージが多いのではないのでしょうか。フィンランド人に日本のイメージを聞くと、「清潔」「機能的なデザイン」「最先端の技術」と日本人がフィンランドに対して抱くイメージと非常に似ていることに驚いたものです。

本稿では、北海道と同程度の人口でありながら世界で存在感を発揮するフィンランドについて、その特徴と成功の要因を、私見とはなりますが3年間の駐留経験から紹介いたします。

### 沿革・位置

フィンランド共和国は北ヨーロッパに位置するいわゆる北欧諸国の1国で、12世紀～18世紀はスウェーデンの一部でしたが、1809年にスウェーデンからロシアに割譲された後、1917年にロシアから独立し、現在のフィンランド共和国となっています。

緯度はフィンランドの南に位置する首都のヘルシンキでも、稚内の宗谷岬より約15度高く（距離にして約1,600km北に位置する）、また、国土の約3分の1は北極圏に位置しており、厳しい自然条件等により昔は非常に貧しい地域であったとされています。



フィンランド位置図

国土面積は33.8万km<sup>2</sup>、人口は約552万人で、ほぼ日本の国土面積に北海道の人口が住んでいる状況で、北海道と比較しても人口密度が非常に低い国です。また、国土の約7割は森林、約1割は湖沼と豊かな自然溢れる国となっています。



森と湖（フィンランド湖水地方）

### フィンランドの経済

フィンランドは、人口の少なさに起因して内需が小さいため、基本的に外需に頼った経済となっています。

産業としては豊富な森林資源を活かした森林産業を伝統的基幹産業としつつ、金属・機械産業がこれに加わり、近年は、情報通信産業が主要産業の一角をなしています。

北欧の小さな国ですが、一人当たり名目GDPは日本の約1.3倍と高く、特に近年は高い技術力を活かしたイノベーション（技術革新）に注力しており、また、若者を中心に起業が盛んに行われ世界的にも注目を集めています。フィンランドで開催されている「Slush（スラッシュ）」は、世界有数のスタートアップイベントで、世界中から投資家や起業家が集まる一大イベントとなっています。

失業率は2021年時点で7.7%と日本から見ると驚くほど高く見えますが、フィンランドは職業教育やセーフティネットが充実しており、また、雇用システムはいわゆるジョブ型雇用が多く（終身雇用が少なく）、省庁や企業がポストを日々公募するため、自身のキャリアアップのために一時失業を選択するなど、社会システムとして一定数の失業者が生じており、一概に日

本と比較することは意味を成しません。逆に、一度就職した後も続けられる自己研鑽<sup>けんさん</sup>が高い個人の能力につながり、ひいては高い技術力・生産性につながっています。なお、フィンランドでは、雇用中でも雇用主との合意ができれば学習休業の取得が可能と法律で位置づけられています。

### 世界幸福度ランキング 6年連続 1位

世界幸福度ランキングは、国連の持続可能な開発ソリューションネットワーク（SDSN）が2012年から年に1度公表しているもので、2023年の報告書では137カ国・地域を対象として行った調査結果を公表しています。日本とフィンランドは、お互い似たイメージを抱きながらも、本指標では大きく結果が異なっています。

項目	フィンランド	日本
総合順位	1位（/137か国）	47位
一人当たりGDP（実質）	18位	29位
健康寿命	23位	2位
社会的寛容さ	80位	135位
社会的支援	2位	36位
人生の選択の自由度	1位	71位
社会の腐敗度	2位	29位
全項目が最低である架空の国（ディストピア）との比較	16位	108位

世界幸福度ランキング（2020-2022の平均値でのランキング）

評価される7項目のうち、「一人当たりGDP」と「健康寿命」は単純な数値により算出、「社会的寛容さ」については、最近の寄付額から算出するものであり、順位としてもこれらの項目については特筆すべきものはありません。

一方、それら以外の4項目は非常に高い結果となっています。特に「社会的支援」「人生の選択の自由度」「社会の腐敗度」の3項目は、アンケートの回答を数値化した主観的指標であり、フィンランド国民の自国の社会システムへの高い満足度が現れています。

最終的には、全ての指標を点数化し足し合わせた結果、フィンランドが1位となり、世界一幸せな国と言われています。なお、フィンランドは2018年のランキングから6年連続で1位を獲得しています。

こういったことを見ていくと、フィンランドが理想的な国家のように幻想を抱く人がいますが、当然、全てがうまくいく理想郷などはありません。

例えば、充実した社会システムの構築・維持には多額の予算が必要であり、付加価値税（消費税）の基本税率は24%であるなど、税や社会保険料を合わせた国民負担率は42.7%（2018年）と日本より10%以上高いことも忘れてはならない実態です。

また、若年層のニート率は日本の1.4倍、離婚率は1.5倍で、自殺率も日本よりは低いもののEU平均より高く、出生率も近年急激に低下して、少子高齢化、労働人口の減少が社会問題となっています。

これらの課題があるにもかかわらず、世界一幸せな国に位置づけられ、かつ、世界で存在感を発揮するフィンランドの特徴と成功の要因を紹介します。

### 寛容な社会風土とチャレンジ精神

近年、世界的に注目を集めているフィンランドの取り組みは、世界各国で生じているもしくは生じるおそれのある社会問題に対して、世界に先駆けモデル的に取り組みを実施していることにあります。

この背景には、フィンランドの国の規模が適度であり動きやすいことに加え、国民の社会を良くしようとする公共精神の高さ、基本的に性善説に立った考え方、失敗に対して寛容な社会風土（モデル的取り組みは当然失敗もあると認識していること）といった、国が貧しかったころから養ってきたフィンランド人の精神性が多分に影響しているものと考えられます。

このことを活かし、近年では、他国に先駆けたベーシックインカム<sup>\*1</sup>の社会実験や、2035年までにカーボンニュートラル、2030年代末までに発電・発熱において化石燃料を使用しない世界で初めての社会を実現することを目標に取り組むなど、世界でより注目を集めることとなっています。

#### \*1 ベーシックインカム

性別や年齢、所得水準などによって制限されることなく、すべての人が国から一定額の金額を定期的かつ継続的に受け取れる社会保障制度のこと。

### 共創と社会実装

このモデル的取り組みで成果を上げるに当たり、最も注目すべき点としては、共創（co-creation）の考え方が根付いていることにあります。日本では社会的問題の解決に向けて産官学連携という取り組みがありますが、それを劇的に進めたものとなります。

この背景には、前述の公共精神の高さや性善説に立った考え方に加え、科学的根拠に基づく他者への信頼、ルールを遵守する真面目な国民性、限られた人員・資源を把握し選択と集中を行う自己分析力の高さ、そして社会貢献が評価される社会的風土といった複数の要因が組み合わさっているものと考えられます。

歴史的背景としましては、フィンランドでは、1970年代後半のオイルショックによる大規模な不況及び失業率の上昇を受け、新たな産業としてIT産業を軸に据えることを考え、IT関連の教育を推進しました。また、1991年のソ連崩壊による景気悪化など、度重なる世界情勢の変化による景気悪化を受け、産官学が極めて密接に協力する、フィンランドシステムとも言われる経済システムを作り上げ、研究から実用化・製品化が、競争ではなく協力により迅速に行われる環境が整えられたことにあります。さらに、2008年の世界的な経済危機及びその後のノキアの携帯事業での失敗を受け、TEKES（フィンランド技術庁）やFINPRO（現Business Finland）、SITRA（国立研究開発基金）等の公的機関、大学等の研究機関や民間企業（ノキア等）などが連携してクラスター政策を推進していきます。また、民間企業や大学などが運営するサイエンスパークが、新規技術の開発、イノベーションに重要な役割を担うスタートアップ企業のインキュベーターとして重要な役割を担うとともに共創の取り組みの基盤となっています。現在では成功したスタートアップ企業が後進のスタートアップ企業に投資し、さらなる技術開発が促進される好循環が作り出されています。

この共創による社会問題への取り組みは、国が大方針を指し示し、自治体、研究機関、数十の民間企業が一つのプロジェクトを進めており、社会実装を前提とした取り組みになっています。メンバーに国や自治体

も入っており、社会実装に障壁となる規制等の改正も柔軟に行われることにより世界的にも圧倒的な速度で社会実装実験が行われています。

当然、これらの実施に当たって全てが成功するものではありませんが、はじめから100点を指すのではなく、50点、80点と段階を踏みながらトライアンドエラーを繰り返し進めることで、世界に先駆けた知見を得ることが可能となっています。

### 自国への愛とイメージ戦略

フィンランドは、年功序列の社会制度ではなく、基本的に個人主義であり、ポストは公募制で、各々は自己研鑽を行いながら次のポストへ応募してステップアップすることが基本となっています。一見バラバラに見える社会において、社会問題に対応するために一丸となって取り組んでいる背景には、前述の公共精神の高さや社会貢献が評価される社会的風土だけでなく、なにより強く感じたのは自国への誇りと愛です。

フィンランド人と話していると、自国のことを「(経済的に)小さな国」と謙虚に言いながらも必ずその後プラスの表現の言葉が続きます。また、きれいな湖水地方やサウナが好きと伝えると非常に嬉しそうな顔をするのが印象的です。

普段はシャイなフィンランド人ですが、対外的なイメージ戦略も大切にしています。

例えば、国営放送Yle（日本でいうNHK）のニュースを見ていると、フィンランド語のニュースではいろいろなニュースが流れていますが、英語ニュースでは比較的悪いニュースが少ないように見えます。また、「Good News from Finland」というサイトでは、徹底的にフィンランドの良いところや新商品、新政策等を対外向け（このサイトにフィンランド語はなく、英語、ロシア語、中国語）にアピールするなど、イメージ戦略も大切にしていることが見て取れます。

さらにこの良好なイメージを持って、近年では自国の取り組みをブランド化し、市場を作り出し技術を世界に売り出す仕組みを作り上げつつあります。例えば、気候変動問題に対しては、2035年に世界初のカーボン

ニュートラルな福祉国家を目標に設定し注目を集めるとともに、サーキュラーエコノミー\*2という言葉の世界に広め、その中心的な役割を果たすと共に、市場を確立しそこに先進的な自国の技術<sup>したた</sup>を売り出すことによって実利も得る強かさも持っています。

### おわりに

北海道と同程度の人口規模でありながら世界で存在感を発揮するフィンランドについて、その特徴と成功の要因を紹介してきました。

フィンランドは、厳しい自然・社会条件の中で生き延びるため、足りない人手を助け合いと個人の能力の強化という2面で補いながら発展してきました。3年間フィンランドで生活してみて、フィンランド人の優しさと内に秘めた強<sup>お</sup>かさが現在のフィンランドの基盤となっていることを強く感じました。

フィンランドは、日本以上ではないかと感じる治安の良さ、ミネラルウォーターより<sup>おい</sup>美味しいと言われる水道水、日本からの直行便による移動の容易さ、そして何より、ほぼ英単語のみで意図をくみ取ってくれる優しいフィンランド人と、海外旅行初心者でも安心して行くことのできる数少ない国です。

きれいな湖畔の本場のサウナで安らぎ（日本人の謎の「ととのう」ではなく心からのリラックス）、フィンランド人の優しさと強さに触れてみてはいかがでしょうか。人生観が変わる出来事に会えるかもしれません。



サマーコテージのデッキより

#### \*2 サークュラーエコノミー (Circular Economy)

日本語で「循環型経済」。これまで経済活動のなかで廃棄されていた製品や原材料などを「資源」と考え、リサイクル・再利用などで活用し、資源を循環させる、新しい経済システムのこと。